高知県立文学館ニュース

藤並の森

Vol.5

●四万十川のトサシモツケ（写真提供／野町泰造氏）

リレー随筆⑤　我が故郷、朝倉 ―― 宮地佐一郎

「暁
　―影無山にて―
一点鐘　二点鐘　僕らの暁は近づいた
　僕らのわかれは近づいた　昏い帷の
中に　さゝやきと口づけがあった
灯がおちた　醒めてゆく浄界の中に
僕らはもっと燃える　長い夜道のさす
らいだった　僕らで充満した世界だっ
た　腕や頬はまだ温かい
一点鐘　二点鐘　誰が鳴らすのか　わ
かれが近寄る　わかれの口づけ　これ
がわかれの口づけ」

　恥ずかしいが、私の青春が所有した三好達治ばりの詩である。当時、高知県教組「るねさんす」に発表したものである。恋におちいった二十幾歳の頃、私は故郷高知市西郊朝倉の、旧練兵場から影無山そして鵜来巣山の附近を、その人を誘って夜ごと彷徨した。その人は私の今の妻である。

　私は昭和二十六年の頃、その人を伴って故郷を「脱藩」して東京へ走った。その頃から朝倉は「滄桑の変」が始まっていた。四万五千坪の美しい草原、朝倉練兵場は埋めたてられて「若草町」という住宅街に変貌した。

　丘陵地は平にならされ、ポプラ並木は切り倒され、武將鵜来巣彈正の朝倉支城だった小山は削りとられ、緑したたる草原はすべて景観を喪失した。

　チエホフの「桜の園」には、ロパーピンが桜を斬りたおす斧の音が描かれている。私は練兵場のショベルカーや、ブルドーザーの音を聴かなかったが、帰省の度、美しい緑の風景を無残に失ってゆく、故郷朝倉を見た。

「何んという暴力、何んたる無常ぜよ。国立朝倉公園として残しておきたかったのう」

　と言おうものなら忽ち、

「脱藩人の佐一郎が何を言うぜよ。朝倉は軍都から学都に変った。国亡びて四四聯隊が、国立高知大学のキャンパスに昇格したがじゃ」

　と礫がとんでくるのであった。私は「一点鐘、二点鐘」から半世紀ぶりに、ノスタルジアの詩に鬱懐を述べた次第である。

「あるランドス・ケープ
　―旧朝倉四四聯隊練兵場―
　蒼々たるランドス・ケープがあった
　ひたすらに緑に濡れて深くあった
若い兵隊たちを覆うてしまうのであっ
た　ポプラ並木はトンボ川の縁に　等
間隔で立哨していた
　敗戦のある日　風景はショベルカー
で削りとられた　庶民のたつきに占領
された街　負けてしまった練兵場　蒼
海変じて桑田となり　更に人煙の巷と
化す　チョーカを光らせた将校も
薬莢を落した初年兵も戦死した　トン
ボを追った少年は無為に年老いてし
まった」

（作　家）

高知県立文学館

◆次回企画展によせて◆

石川啄木展

―貧苦と挫折を超えて―

会期―8月3日(火)～9月19日(日)

石川啄木…彼はまぎれもなく、明治の人でした。貧困と病苦に喘ぎながらも、明治の青年らしく精一杯、真剣に生き、そして、明治の終焉とともに生涯をとじました。

美しい魂と、優れた才能を持ちながら、二十六才と二ヶ月という夭折の人生は、流亡不遇の生涯といえます。しかし、啄木の人と文学は、二十一世紀を迎える今日においても、今なお、私たちの心の中に生き続けています。

「三行分かち書き」で、これまでの短歌形式を打破した人物としても知られている啄木は、明治十九年岩手県日戸村・曹洞宗日照山常光寺に父一禎、母カツの長男として生まれました。明治二十年、啄木が一才の時、父・一禎が渋民村の宝徳寺住職となります。北上川の畔、西の岩手山、東の姫神山に囲まれたこの渋民村（現玉山村）の自然の中で、両親が短歌をたしなむという知的環境に恵まれ、幼少より「神童」と称され、もてはやされたこのころの彼は、何不自由のない生活を送っていました。(父一禎は、特に歌作も多く、約三千八百首の歌稿「みだれ芦」を今日に残しています。啄木は、この歌人の血を受け、又早くから歌作に苦悩する父の姿に接し、自然に短歌の世界になれるとともに、文学的な資質を高めていったと考えられます。) 盛岡高等小学校、盛岡中学校と進み、盛岡中学校では、金田一京助、野村胡堂らとの出会いにより文学に熱中。堀合節子との恋愛も重なり、学業はおろそかになり、成績低下、不正行為等による再三の譴責処分のあげく退学となってしまいました。そして、明治三十五年十月、与謝野鉄幹、晶子主催の雑誌「明星」に白蘋の名で短歌一首「血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野にさけぶ秋」が掲載され、これを機に文学で身を立てようと上京。与謝野家に頻繁に出入りし、新詩社の同人に加わりましたが、収入の道はなかなか得られませんでした。その後、行き倒れ同然となった啄木は、父一禎に伴われ帰郷。宝徳寺で病の身を養うことになります。彼はこの時期から詩作をはじめ、「明星」に「愁調」等五編を発表。明治三十八年五月には、小田島書房より処女詩集『あこがれ』を刊行。(この詩集には、上田敏の序詞と与謝野鉄幹の跋文が付され、装丁は、同郷の友人石掛友三で、詩集の扉には「この書を尾崎行雄氏に献じ併せて遙に故郷の山河に捧ぐ」献辞があり、作品七十七篇が収録されています。) しかし、『あこがれ』刊行のため上京中に、父・一禎が宗費滞納によって住職を罷免され、両親、妹光子を抱えた啄木と節子の盛岡での新婚生活は、困窮をきわめました。明治三十九年三月、ふるさとに戻った啄木は、渋民小学校で代用教員をつとめるかたわら、一禎の宝徳寺住職復帰運動を展開。一方では、収入を得るために「雲は天才である」などの小説を執筆しますが、窮状打開は実現せず、父の復職は、結局失敗に終わってしまいました。明治四十年五月、啄木は交流のあった苜蓿社の同人を頼って、新天地を北海道に求めました。函館日々新聞社に職を得て、離散した家族が再び集まりますが、平穏な生活は、大火によって消滅。こののち札幌、小樽、釧路と移動、北海道流離の旅は続きます。明治四十一年四月、運命の打開を求め、啄木は、妻子を宮崎郁雨に託して上京。金田一京助の下宿赤心館に寄宿します。しかし、森鷗外の紹介によっても、彼の小説は売れず、ようやく朝日新聞社校正係の職を得、働きはじめました。明治四十二年、「明星」終刊のあと、高村光太郎、吉井勇、平野万里らと「スバル」を発刊。誌名の命名は、森鷗外。当初の編集発行人は、啄木でした。短歌実作の意欲が結実し、此ののち歌集『一握の砂』を世に問うこととなります。(刊行は、明治四十四年十二月、啄木の三行分かち書きの手法は、土岐哀果のローマ字歌集「NAKIWARAI」に触発されたものであるといわれています。『一握の砂』初出時には、一行書きで書かれていたものが、歌集『一握の砂』収録にさいしては、この手法に改められ、『悲しき玩具』の中では、さらに句読点が施されています。彼は、どんな時代においても、人間である限り、必ずぶつかるであろう、実人生の悲しみや苦しみの数々を、これらの短歌に託しました。でも、決して、この「三行分かち書き」に固執していた訳ではありませんし、三十一音に執着していたわけでもありません。これらは、いわば伝統的な短歌の調べに対する啄木の反逆であり、伝統を重んじるよりも、自己に忠実であろうとした、彼の野望の現れと考えることができるでしょう。そして啄木の短歌は、のちの萩原朔太郎、中原中也、宮沢賢治、立原道造、といった優れた現代詩人達に大きな影響を与えることなります。) 明治四十三年六月、「人生の落伍者」という自覚から社会や歴史に目を転じた啄木は、革命的思想に傾斜していくこととなります。そんな時発覚した「大逆事件」に衝撃を受け、「時代閉塞の現状」を執筆しますが、掲載にはいたりませんでした。東京での啄木は貧困に加え長男の死、妻節子の家出、老母の病気、慢性の腹膜炎の手術など相次いで不幸に見まわれます。そんな中、土岐哀果の奔走で出版の決まった第二歌集『悲しき玩具』は彼にとって唯一の希望でしたが、その発刊を待たずして、明治四十五年四月十三日、父と妻、友人若山牧水にみとられながら、啄木は、肺結核の為、二十六才と二ヶ月の生涯を閉じました。そして、同年六月、彼の死後土岐哀果の命名により、第二歌集『悲しき玩具』が東雲堂書店より刊行されました。

中村稔先生もおっしゃっておられるように啄木ほど誤解され、また、謎に満ちた文学者はそう多くはいないでしょう。彼は「やはらかに柳あおめる北上の岸辺目にみゆ泣けとごとくに」「東海の小島の磯の白砂にわれ泣きぬれて蟹とたはむる」といった、感傷と望郷の愛誦歌の作者として一般には知られていますが、これらの歌は、彼の一面にすぎないし、また彼の本質ではないでしょう。むしろ、わが国ではじめて自己崩壊の危機に立ち向かいながら、その実存をうたい、近代人の無為と倦怠を歌った歌人とみるべきではないでしょうか。また、彼の詩人としての出発の詩集は、『あこがれ』ですが、この作品をたんに彼の才気と、衒気にみちた先人の模倣の作と見る評価もあります。しかし、そのような評価は、訂正されなくてはならないでしょう。二十六才と二ヶ月という稀有の生涯の中、彼ほどのつよい挫折感、屈辱感を味わいながらもその中から、詩を書きはじめた詩人は稀であり、さらにローマ字日記中の詩や「われは知る、テロリストのかなしき心を」とはじまる「ココアのひと匙」や、「はてしなき議論の後」その他の『呼子と口笛』の詩は、やはり「前人未踏の思想的な深みに達している。」とみるべきではないでしょうか。さらに、彼の晩年における「時代閉塞の状況」から、大逆事件に対して、敏感に反応した彼における社会主義、無政府主義の意義も問い直される必要があるでしょう。彼は、その生涯を通じて金銭的に、金田一京助、宮崎郁雨、土岐哀果といった、多くの友人たちに支えられ、父母、妻子を乏しい収入で支え、薬餌にもことかく貧困のうちに、その生涯を終えることとなります。それが彼の生き方の無謀、無計画によることは事実としても、その苦悩の真率さを疑うことはできないでしょう。彼は、あまりにも早く生まれすぎたのです。明治という時代に適合できず、この時代に受け入れられなかったのです。時代に適合できない場所で、彼の文学は生まれ、彼の才能は時代を駆け抜けて行きました。そして、彼の文学は時代を超えて、今日も私たちの心に迫ってくるのです。

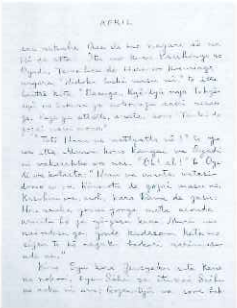
今回の企画展では、『一握の砂』『悲しき玩具』所収の短歌を基調に、詩集『あこがれ』や『呼子と口笛』『時代閉塞の現状』などを通して、啄木の軌跡を紹介しながら、啄木の短歌や詩を思い出し、鑑賞していただけるよう展示構成いたします。なお、今回、ご指導いただいております中村先生の試訳も興味深くご堪能いただけることと思います。

また、今回は夏休みということもあり、小学生にも啄木の短歌に親しんでいただけるよう「お母さんとこどものためのたくぼく展」のコーナーを設けます。歌の世界をやさしいイラストで紹介。会場の入り口では、啄木ロボットが子供達をお出迎えします。

土佐は、啄木の父一禎の終焉の地であります。また土佐ゆかりの作家吉井勇とは森鷗外を介して出合いました。そして啄木の晩年の作品思想に大きく影響を与えたといわれる大逆事件。この事件の首謀者と目され死刑となった幸徳秋水は、土佐の出身です。このように啄木と土佐は決して無縁ではありません。石川啄木展―貧苦と挫折を超えて―がこの地で開催できますことを、心から御礼申し上げますとともに、多くの皆様に啄木の世界を味わっていただければ幸いです。

（学芸員　津田加須子）

詩稿ノート 呼子と口笛


ローマ字日記

小説「雲は天才である」

啄木16歳の肖像

【主な展示資料】

小説「雲は天才である」等自筆原稿
金田一京助、野村胡堂、高田治作宛書簡
詩稿ノート「黄草集」「はてしなき議論の後」「呼子と口笛」「一握の砂以後」
父一禎所蔵「正法眼蔵」他150点

【朗 読 会】

日時／8月8日（日）午前10時～午後4時
場所／文学館1階ホール
講師／日本ことばの会　渡辺知明氏　他
定員／100名
（ハガキでお申し込みください）
内容／講演、朗読会、座談会

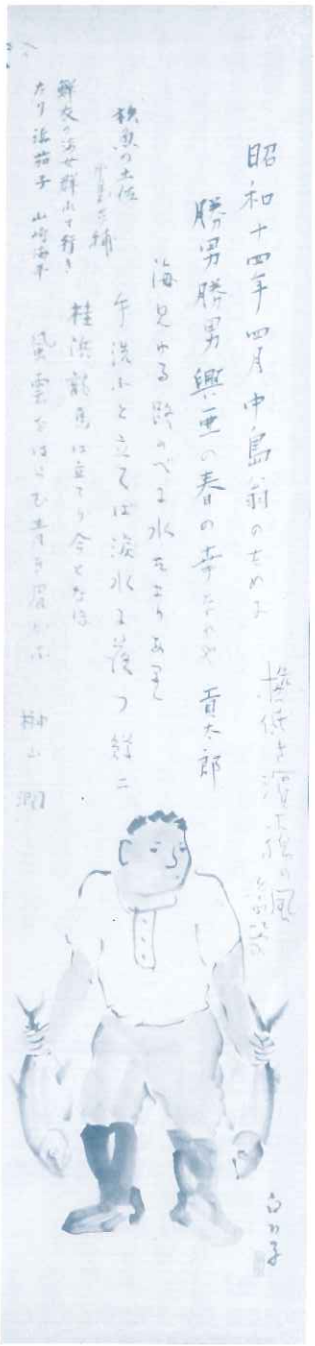
【記念講演会】

日時／9月4日（土）午後1時～
＊基調講演
演題／啄木の新しさと魅力
講師／日本近代文学館理事長・詩人　中村稔氏
＊パネルディスカッション
日本近代文学館理事長・詩人　中村稔氏
歌人　佐々木幸綱氏
石川近代文学館学芸員　山本玲子氏
定員／150名（ハガキでお申し込みください）

学芸員メモ① 資料紹介

「博浪沙」関係資料2点

1、「中島翁への博浪沙寄書き軸」



中島成功氏旧蔵 当館寄託

実録『貢太郎見聞録』や小説『旋風時代』で大正・昭和の読者を魅了した作家田中貢太郎（一八八〇―一九四一）のもとには、尾崎士郎、井伏鱒二、田岡典夫、浜本浩など多くの若き作家が集まった。「ちくと一杯」の酒を通じての集いでもあり、また、自由・反骨の精神を尊ぶ野人的文士の集まりでもあった。

随筆雑誌「博浪沙」を発刊、戦時体制下へ向かうあの暗い昭和十年代にも、よくその自由闊達な精神を貫いた。

さて、博浪沙一行は幾度か土佐を訪れているが、この寄せ書きは昭和十四年四月に土佐に遊んだときのもの。土佐で世話になった高知新聞社の中島成功氏に礼として贈ったものらしく中島氏の令嬢夫妻から寄託を受けた逸品。

吉井勇との友情でも数々の逸話を遺した伊野部恒吉翁を交えての田岡典夫邸での愉快な宴、浦戸湾の廻し打ち、土佐闘犬、桂浜、室戸岬、龍河洞など土佐路の春の風光と人情と酒を満喫したようだ。

「博浪沙」の表紙絵を担当した高橋白日子が描いた「鰹を持つ男」の絵に貢太郎ほか同人が寄せ書きしている。

昭和十四年四月中島翁のために
勝男勝男興亜の春の幸なれや　貢太郎

海見ゆる路のべに水たまりあり
手洗ふと立てば涙水に落つ　鱒二

松魚の土佐　牛島英輔

鮮衣の海女群れて行きたり浜茄子　山崎海平

桂浜龍馬は立てり今もなほ
風雲をはらむ青き眉かな　榊山　潤

檐低き浜木綿の風　添田吐蒙

貢太郎の句からは次第に戦争色を深めてゆく時代の意識がおのずと伝わってくる。なお榊山潤は、この年十二月に『土佐人文記』を世におくり出している。

さて、貢太郎は翌十五年二月に安芸で大吐血。病床で療養がちの日々となり、十六年二月に死去。思えば貢太郎にとって、気心の知れた弟子たちと、在所の土佐で、飲み且つ遊べた最後の春でもあった。

2、高知桟橋での博浪沙一行写真

昭和十四年四月の高知桟橋である。田中貢太郎の右後ろに立つ細面の凛々しい青年が田岡典夫。鳥打帽は井伏鱒二か。女性二人は、やはり「博浪沙」同人で「右門捕物帖」「旗本退屈男」で人気を博した故佐々木味津三（昭和九年没）の未亡人佐々木克子さん（左）と、彼女の友人田林琴子さん。

右上の寄書軸と同じく、昭和十四年四月来高のメンバーに出迎えの土佐人が加わっているようだ。

服装・表情から推すと、阪神航路の船で早朝到着し、高知桟橋へ上陸した直後でもあろう。西に長く伸びていそうな足元の陰からもそう推測される。

博浪沙一行の高知での写真としては、昭和十年五月、尾崎士郎・井伏鱒二など第一次博浪沙の一行が土佐に遊んだ折、室戸ホテルの前庭での撮影と思われる一枚があるきりで、その他は関係者に尋ねもし、探しもしたが見つからなかった。

それだけに、開館直後に貢太郎の二女梯（かけはし）美穂さん（東京・目黒在住）からご恵送いただいた写真資料群の紙袋の中から、この写真を見い出したときは驚喜したものであった。

（別役佳代）

高知桟橋に降りたった博浪沙一行（昭和14年４月）
左から５人目より田中貢太郎、田岡典夫、１人おいて井伏鱒二か。

学芸員メモ② 心に残った話

安岡章太郎氏の講演を拝聴して

当文学館の名誉館長でもある安岡章太郎氏の講演会が、さる4月17日（土）、城西館創立百二十五周年記念として、城西館日輪の間で開催され、待望していた二百余名の聴衆とともに、滋味溢れる氏のご講演を拝聴した。（演題「わたしと土佐」）

以前、高松市で「土佐人気質」と題してご講演なさった時、「もし長宗我部氏がもっとしっかりしていて、四国を統一しておれば四国はもっと良くなっていたのではないか」というようなことを言ったら聴衆が大騒ぎになったこと。会津へ行った際は、「私は、土佐藩で、親戚の一人が戊辰戦争で流れ弾に当たって戦死した」と前おきすると、辛うじて許されること等々ユーモアを交え、その土地土地の「愛郷心、愛国心」というものについての体験談から、まず話を切り出された。

そして偏狭な愛郷心、愛国心を論され、「結局、日本が一つの島にすぎない。四国が小さな島とすれば、九州はやや大きな島にすぎない。私は高松の人に言いたい。あなた方だって長宗我部と同じじゃありませんか」と説かれる。

「しかしながらナショナリズムというものを、どう慣らしていったらよいか。無くなったら、それはやはりいけないんじゃないか。」とも。ドイツのフルトベングラー指揮時代ベルリン交響楽団が持っていたものが、戦後のカラヤン指揮に代わって、きらびやかにはなったものの、内容空疎になったのではないか、など例話を挙げてのナショナリズムの問題への深い洞察には、氏の度量の大きさを再認識したことだった。

そのほか、陸軍獣医将校だった父親の転任に伴い、小学校を六回も変わったこと、東京府立一中時代の川島源司先生の思い出、片端から読まれた『漱石全集』の思い出など、飾らない氏自身のことばで氏の半生が語られた。

最後は、二日違いで生まれた従兄弟のM氏―常にエリートコースを歩まれ、最高裁判事を務められた―を病院に見舞われたときの話で締めくくられた。

「（そうして時を同じくして人生を歩んできた）Mちゃんが、リハビリで、〈ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む〉を歌っているのを見たとき、ぼくは涙が出ました。」

御年七十九歳になられた安岡氏の、その言葉に、けっして平坦ではあられなかった氏の文学人生を思い、万感迫るものがあった。

（文責・別役）

4／18 春雨降る中を突然ご訪問下さった安岡章太郎名誉館長（右端）。左は才津副館長と当館職員。

閲覧室から

『忘れがたみ』

安岡章太郎 著

今は亡き友、風景などを48篇の随筆で綴った思い出の記。

偶然発見した父の日記から、安岡家と親類関係にあった寺田寅彦と、その甥・別役亮を巡る父の思い出を辿る「血ぼくろ」。父の生家・香我美町山北の風景を原風景とする「土佐に山河ありき」。『悪い仲間』『陰気な愉しみ』で芥川賞を取った頃を回想する「芥川賞受賞前後」など、自身の足跡を振り返るものや、井伏鱒二、佐多稲子、大岡昇平、遠藤周作、吉行淳之介、色川武大、中上健次ら、先立っていった人々への追悼の記など。

「友達が死んで淋しくなるのは、吉行の場合に限らず、三月、半年とたって、その死を全く忘れた頃、青空の下で川べりのすすきの原でも眺めながら歩いているようなとき、突如として思い浮かんでくるのではあるまいか」。安岡氏はそう言いながら、懐かしい人々との心の交流を描く。味わい深い文章から、厚みのある人生観が滲む随筆集。

（世界文化社／1999・4・10／2、000円十税）

※当館閲覧室（利用無料）でお読みいただけます。

県内同人誌紹介

日本文学研究

高知日本文学研究会の機関誌。故西本貞の提唱により、浜田清次を代表として昭和三十二年五月創刊。

その創刊の辞にはいう。「力ある教育の実践には、きびしい学問的裏付けがなければならない」、「われらはあくまでも自由討究の精神をもって、相互の立場を尊重し、真摯に学道することを念頭とする」と。

創刊以来四十一年、刊行誌数は三十六号。学界への貢献には軽少ならざるものがあると自負する。

同人は現在、阿部真司・稲垣安伸・岡崎有鄰・北川真人・榊原忠彦・沢英彦・篠原義彦・杉本瑞井・高橋正・徳満澄雄・戸田浩・浜田清次・藤田加代・松本猛彦・森下幸男の十五名。（浜田清次）

編集兼発行者　高知日本文学研究会
発行所　高知市仁井田一一四八
浜田清次方
高知日本文学研究会
電　話　（〇八八）八四七―五一九三

仁淀川　鎌井田にて

土佐文学さんぽ 4

「猿猴 川に死す」

森下 雨村

水の中を走るような流されるような気持で、わたしも向こう岸近くたどりついた。両足をしっかりと底石にささえて、竿を出す。待つ間はなかった。竿を立てて下手右岸への斜行である。二尾の鮎はぐんぐん下手へ向いて落ちたがる。落ちこみまでは十メートルそこそこである。無理をしては獲物がバレる。ついつい下手へ下手へとひかれてゆく。今一と息というところまできて、魚はとうとう川原寄りの渦巻きに落ちた。が、結局、それが無難であった。四十匁近い鮎が囮といっしょに手網の中にあった。

推理小説雑誌「新青年」（大正九年～昭和二十五年）の初期の編集長として、江戸川乱歩を発掘、横溝正史、甲賀三郎、夢野久作らを育て、自らも少年探偵物の草分けであった森下雨村が、佐川町上郷に帰郷したのは、昭和十五年であった。大正七年、馬場孤蝶の推薦で博文館に入社以来、二十三年間に亘った文壇生活にピリオドを打ったのである。〝日本探偵小説の父〟の名声をほしいままにした雨村の、五十歳という働き盛りの突如の隠棲は周囲を驚かせたが、理由は至って簡単、〝郷里にひとり残された父馬三郎を見守るため〟であった。

昭和四十年五月、七十五歳で没するまで、雨村はひたすら、釣りと栗の栽培に明け暮れたのである。華やかな文壇生活に、何の未練もなかったのだろうか？伝聞を少々収集してみると、未練どころか、都会生活を葬り去ろうとした気配濃厚であった。村人にかつての名声を賛えられると、「あれは、売名だ」と歯牙にもかけなかったという。麦藁帽子、ゲタ履きスタイルで裏通りを好んで歩き、たまに中央から原稿依頼されると、不機嫌極まりなかったとも。華美な探偵文芸マーケットから一介の農夫への転身の秘密―。なんのことはない。余計な詮索など無用というもので、明治生まれの繊細かつ重厚な男のまっとうな身の処し方、やるべきことをやり終えた男が、帰るべきところにさっさと帰ったその後のさり気ない報告書が、本書であった。

×

地元春日川、仁淀川、糺の池はもとより、四万十川、吉野川源流まで及んだ雨村の釣行は、乱費、浪費のレジャー釣りや、鮎の友釣り至上主義といった貴族的な釣りではなかった。露に濡れた畦道を踏みしめ、小さな野川に心ときめかせる懐かしい原始の感情にたっぷり浸かった、あの、ひと昔前の〝田舎のおんちゃん〟の釣りである。

山女魚釣りで一泊した山家で出された白米とドブロクに、貧しい山びとの精一杯のもてなしの心をみた「面河行」。雨村の釣り好きの原点となった鰻のヒゴ釣りを綴った「少年の日」。雨村を慕う精薄の青年の無垢の魂を哀切に描いた「園さんと狸」。欲得の世界から見事に脱却した日々を、三十匁ほどの鮎に象徴させた元博労の「博労の宿」など、一篇一篇、こちらの眼を谷の水で洗い立ててくれる。が、なんといっても、白眉の一篇は、「不具の蟹」。

ふと眼にとまった田んぼのゆる口。そこは、鰻の絶好の棲み家。胸ときめかせた雨村が丁々発止の末、引き摺り出したのは、手足四本だけ残ったみるも無惨な大蟹。行きずりの釣人がヒゴを繰り出さずにはいられない好ポイントを棲み家に選んだ大蟹の何という悲運。雨村は、二度とハリにかかるでないぞ、と祈りつつ堰下の深んどに投げ入れる。

取るに足らぬこんな光景が、人生論的テーマを伴いつつ切ない倍音となってこちらの胸にはね返ってくるのは、雨村の底に、前半生から絞り出された人生の実相への透徹した視点が据えられているからであろう。そう云えば、全篇のあちこちに、村境や人里離れた渓で、かぼそく届けられてくるような一日、一日を無心に消化する人物が影のように登場するが、それは、都会を捨て、故郷というあたたかい地熱に爽やかに溶解していった雨村自身の姿にほかならないのである。

（フリー編集者　国則三雄志）

見どころ＝●青山文庫●司牡丹の酒蔵●青源寺、乗台寺の庭

交　通＝JR高知駅より佐川駅下車

資料受贈報告（平成十一年三月～五月）

敬称略

▼**仙台市**・「ページのなかのせんだい」▼**飛鳥企画**「女性作家シリーズ3」ほか▼**梯洋己**・井伏鱒二著「逃亡記」▼**藤田玲子**・自著「さくら夢幻」▼**岡崎正**・岡崎義恵著「岡崎義恵著作集」ほか▼**岩波書店**・寺田寅彦著「寺田寅彦全集26巻」▼**林玉紫**・自著「（句集）舞扇」▼**山本雅子**・自著「（句集）月明」▼**妻鳥季男**・**湯山愧平**「一壺春詩片」▼**湯山真理氏**・**湯山愧平**著「一壺春曼陀羅華」ほか▼**吉田浩子**・自著「（歌集）風紋」▼**寺田寅彦記念館**・雑誌「寅彦研究」ほか▼**山脇映子**・窪田善太郎著「みどり色の鳥」ほか▼**大崎千明**・自著「（詩集）朝のたまご」▼**松田智幸**・自著「龍馬ら斬殺の新事実」▼**野澤節子**・自著「（句集）飛泉」▼**新人物往来社**「日本全国いちど行きたいユニーク美術館・文学館」▼**美術倶楽部**・「美術家年鑑1999年度版」▼**理化学研究所**・宮田親平著「科学者たちの自由な楽園」▼**野中佐知子**・佐藤春夫著「小説智恵子抄」ほか▼**浜田清次**・自著「万葉集を読む上巻」▼**橋詰緑**・自著「貝がらの詩」▼**鎌倉文学館**・同編「鎌倉文学散歩　長谷・稲村ガ崎方面」▼**北川かおり**・小山慶太著「漱石とあたたかな科学」ほか▼**土屋文明記念館**・平岡敏夫編「群馬文学全集I」ほか▼**東京国立博物館**・同編「東京国立博物館蔵書目録」▼**国立歴史民俗博物館**・同編「棟札銘文集成―近畿編1」ほか▼**西静恵**・自著「（歌集）椿咲く道」▼**中土佐町立美術館**・「司馬遼太郎展図録」▼**森下時男**・酒井茂之著「渓流釣りの名人たち」

◆◆◆文学館日誌 1999年3月～5月◆◆◆

3月

◆2日 徳島県阿南市教育委員会、ノートルダム清心女学院来館。◆5日 精華園、清和学園（松林由美子先生ほか）来館。◆6日 「智恵子抄展」で一日当たりの来館者数が開館以来最多の六九〇名を記録。◆7日「智恵子抄展」（2月6日～）閉幕。期間中の総入場者約六五〇〇名。◆11日 白木谷小来館。◆12日 島根県教育次長来館。◆16日 兵庫県教育委員会来館。◆18日 ミニ企画「龍袍中国へ…湯山愧平展」開幕（2階企画展示室にて。常設展観覧券で入場可）。◆28日 阿川佐和子氏、湯山藍一郎氏とともに来館。

4／9「湯山愧平を偲ぶ…一絃琴とおしゃべりの会」

4月

◆9日 文学館ホールにて「湯山愧平を偲ぶ…一絃琴とおしゃべりの会」開催。小椋克己氏による朗読、森田淳子さん、松本浩子さん、湯山真理さんによる一絃琴演奏。また「思い出の中の湯山愧平さん」と題して湯山藍一郎さん、湯山真理さん、湯山徳九郎さん、橋田館長に語っていただいた。コーディネートは金沢典子氏。入場者約八十名。◆10日 司馬遼太郎展開催記念プレ企画「燃えよ剣」上映会。大雨により観覧申込者の大部分来られず。18日に再上映を行う。両日で約六〇名◆18日 安岡章太郎名誉館長が来館（17日に城西館で「わたしと土佐」の演題でご講演された）。◆23日 嶋岡晨氏、小熊秀雄賞受賞が新聞で報じられる。◆28日 「司馬遼太郎展」搬入のため臨時休館。◆28・29・30日 司馬遼太郎展の列品等準備。◆30日 司馬遼太郎記念財団の上村洋行・元子夫妻来館（翌日も）。NHK高知放送局による取材と収録。

5／1 特別展「司馬遼太郎展」テープカット風景

5月

◆1日 特別展「司馬遼太郎―十九世紀の青春群像」開幕。午前九時半より開場式。司馬財団の上村夫妻、産経新聞社大阪本社浜見事業部長、NHKサービスセンター松山支局赤松支局長、NHK高知放送局山田次長、池田文化環境部長、橋田文学館長によるテープカット。前梼原町長中越準一氏や出品協力下さった村田正亀氏ほか約四十名の来賓が出席。松尾市長夫妻来館。◆2日 RKC高知放送の中屋氏、細川氏ほかによる取材と収録。◆2・3・4日 ゴールデンウィーク高知城の開館時間延長にあわせ、午後七時までの延長開館（延長時間の観覧者計三十八名）。◆7日 シルバー大学の皆さん来館。高知さんさんテレビの藤田氏ほかによる取材と収録。◆11日 高知女子大学生、三浦助教授と来館。香川県詫間中学校、川邊洋子先生、渡邊恵美子先生ほか来館。◆12日 高知北高校生、片岡先生と来館。◆13日 テレビ高知の窪内氏伊藤氏による取材と収録。丸ノ内高校、松田、大川、山本先生ほか、および越知中学校、田所郁子先生ほか来館。◆14日 城西中学校来館。◆15日 「司馬遼太郎展」記念講演会開催（於：高知城ホール。演題「坂本龍馬と司馬遼太郎」講師は渡辺司郎氏。入場者二百余名）。同日、「司馬遼太郎展」の「竜馬がゆく」コーナーの監修を担当され、また第二十回平尾賞受賞も決定した青山文庫の松岡司氏来館。◆16日 渡辺司郎氏再来館し、展示をご覧になる。◆18日 越知中学校来館。◆20日 城北中学校、中村先生ほか来館。◆21日 澤田常則氏来館 ◆22日 故司馬遼太郎氏夫人の福田みどり氏が松丸朝子氏、村井重俊氏、大道絵里子氏、山県貞功氏、近藤大博氏、窪内隆起氏らとともに来館（24日離高）◆27日 アンパンマンミュージアムの徳久学芸員ほか来館。◆28日 「デイサービスセンター土佐」の皆さん来館。◆29日 高知新聞の岩井社長夫妻来館。◆30日 「司馬遼太郎展―十九世紀の青春群像」閉幕。期間中の総入場者は五〇七九名。産経新聞の横山氏、熊田氏、藤本氏、およびNHKサービスセンターの石本氏ほか来館。同日夜、特別展示を撤収。

渡辺司郎講師による
「司馬遼太郎展」記念講演会

「司馬遼太郎展」
＜19世紀の青春群像＞コーナーで

非公式に来館された福田みどり氏一行5／22

【人事異動】

■転出
長寿社会政策課 主幹 北川かおり

■転入
学芸課 主任 嶋崎るり子
（環境保全課主任）

高知県立文学館ニュース　第五号　平成十一年七月一日発行　〒七八〇―〇八五〇　高知市丸ノ内一丁目一番二〇号　電話〇八八―八二一―〇二三一　FAX〇八八―八七一―七八五七

高知県立文学館カレンダー

1999年

7～9月

	7月――July	8月――August	9月――September

常設展示

ミニ企画展　［土佐句テニハの世界］（7月6日～9月19日まで　常設展示室内にコーナー展示）

テニハとは、江戸中期ごろに土佐に生まれた変調の狂句です。7．6．4、7．5．4などの独特のリズムは、全国でも例がないもので、庶民たちの間で大流行しました。それらはみな、当時の庶民の生活からふとこぼれた、愚痴や笑いの実感の句でした。これらのなかには、土佐の方言も豊かに息づいています。機知あふれるテニハの世界をどうぞお楽しみください。

催しもの

学術会議記念講演会

＊7月7日（水）午後1時半より受付
＊文学館1階ホールにて
＊講師・演題
◎Ⅰ部：石川忠久氏
（二松学舎大学大学院教授）
「漢詩に見る“友情”“愛情”」
◎Ⅱ部：中西進氏（大阪女子大学学長）
「源氏物語の“愛”」
◎Ⅲ部：平岡敏夫氏（筑波大学名誉教授）
「啄木、秋水、トルストイ―日露戦争反戦論のゆくえ」
（注）この講演の聴講者の募集はすでに締めきっております。

第2回児童生徒朗読コンクール

県内の小・中学生対象。1校3人以内を学校より推薦。参加希望の方は7／6までに県立文学館にお問い合わせ下さい。
＜地区予選＞
＊8月13日（金）高知会場（県立文学館）
＊8月18日（水）安芸会場（安芸市中央公民館）
＊8月20日（金）大方会場（大方あかつき館）
＜本選・一般公開＞
＊11月6日（日）会場・高知県立文学館
＜記念講演会＞
＊11月6日（日）午後1時～
＊文学館1階ホール
＊講師・演題
「子どもと本のおいしい関係」山下明生氏
＊入場無料

'99専門講座〈田中英光〉②　7月17日（土）
作品（一）青春篇－「オリンポスの果実」他

'99専門講座〈田中英光〉③　8月21日（土）
作品（二）思想篇－「N機関区」「少女」他

'99専門講座〈田中英光〉④　9月18日（土）
作品（三）デカダン篇－「野狐」「君あしたに去りぬ」他

特別企画展

〔石川啄木展　―貧苦と挫折を超えて―〕　8月3日（火）～9月19日（日）

関連催し物

【朗読会】
日時／8月8日（日）午前10時～4時

場所／文学館1階ホール
講師／日本ことばの会　渡辺知明氏　他
定員／100名（ハガキでお申し込み下さい）
第1部　午前10時～午前11時30分
○講演と表現よみの発表（文学作品の朗読法）日本コトバの会　渡辺知明氏
第2部　午後1時～午後2時
○石川啄木の世界－詩と評論による構成表現よみ「雲は天才である」他
第3部　午後2時～
○座談会

【記念講演会】
日時／9月4日（日）午後1時～4時
＊基調講演
演題／啄木の新しさと魅力
講師／日本近代文学館理事長・詩人　中村稔氏
＊パネルディスカッション
日本近代文学館理事長・詩人　中村稔氏
歌人　佐々木幸綱氏
石川近代文学館学芸員　山本玲子氏
定員／150名
（ハガキでお申し込みください）

【休館日】7月――5，12，19，26日　8月――2，9，16，23，30日　9月――6，13，20，27日

秋の特別展予告

田中英光展
10月9日（土）～11月28日（日）

現在文学において鮮烈な印象を残す青春小説「オリンポスの果実」。オリンピック選手にして作家の本県出身の田中英光。戦中・戦後の混迷の時代に作家を志し、文学といえども社会と無関係に存在しえないという信念で理想を追い求めた激しい生き様を、没後50年の節目に、師・太宰治との関わりや、英光と昭和文学の流れを概観します。

利用案内

開館時間　午前9時～午後5時（入館は、午後4時30分まで）

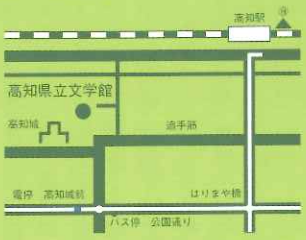
休館日　毎週月曜日（休日・祝日の場合はその翌日）
年末年始（12月26日～1月1日）

観覧料　一般300円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県長寿手帳所持者及び身体障害者手帳（1・2級）療育手帳、障害者手帳所持者等とその介護者1名は無料です。

駐車場　なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設　企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



●高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
●JR高知駅下車徒歩20分
●土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩4分
●バス停公園通り下車北へ徒歩4分

高知県立
文学館
高知市丸ノ内1丁目1－20
電話　088・822・0231
FAX　088・871・7857
〒780-0850